

図書館員のためのネット、ネットのための図書館員

-- NIFTY-Serveで図書館フォーラム会議室を運営して --

兎内 勇津流

北海道大学スラブ研究センター

昨年9月にNIFTY-Serveの生涯学習フォーラム内に発足した図書館フォーラム会議室は、これまで1600発言近い書き込みがあるなど、盛況である。

パソコン通信内で図書館をキーワードとしたオープンな交流の場はこれがはじめてと思われるが、その現状を報告するとともに、その背景、有効性と限界、将来の展望について考えてみたい。

BBS for Librarians, or Librarians for BBS

Management of Library Forum SIG in Nifty-Serve,  
a Large Commercial BBS Service in Japan

Yuzuru Tonai

Slavic Research Center  
Hokkaido University

Kita 9, Nishi 7, Kitaku, Sapporo, 060 Japan

We began to manage Library Forum in Nifty-Serve. This circle consists of five librarians belonging various types of libraries, who live in various areas of Japan. It is, probably, the first attempt to manage such an open SIG in commercial BBS service in Japan.

In this article, I try to show how we manage this Forum and give backgrounds of SIG needs of libraries, and discuss the validity, limitation and perspectives of our activities.

## 1. はじめに

NIFTY-Serveは、今や会員数100万人を超える大手のパソコン通信サービスである。

ここでは、フォーラムと呼ばれる一定の関心を持つ人々に開かれたコミュニケーションの場があり、各フォーラムでは毎日のようにいくつも新しいメッセージが書き込まれている。各フォーラムにはデータ・ライブラリーが備えてあり、ソフトウェアやデータ類の頒布、過去の会議室のlogの保管などに用いることができる。

筆者を含む5人のグループは、昨年9月に、NIFTY-Serveの生涯学習フォーラム (FLEARN) 内に、フォーラム in フォーラムとして図書館フォーラム会議室を設け、運営に当たっている。

図書館員同士による、あるいは図書館をテーマにした、BBSやネットワーク上の議論の場は、他にもいろいろあるのであろうが、大手のパソコン通信でこのような場ができたのははじめてであり、現在も他にはないと思われる。

本稿では、その発足の経緯、これまでの経過を紹介しつつ、図書館界における電子的コミュニケーションの利用の可能性と問題点について考察を試みる。

## 2. 図書館の仕事とコンピュータ

経緯を紹介する前に、前提条件として、日本で図書館の仕事とコンピュータがどのように関わってきたかについて、筆者の体験に引き寄せた形で、若干整理と解説をしておきたい。

筆者はこの3月までの7年間、国立国会図書館(以下、国会図書館)に在職し、閲覧や整理など司書系の業務に従事してきた。この7年間に図書館の仕事が大きく変わってきたことを感じている。

国会図書館の外の動きを見ても、東大文献情報センターが学術情報センターに改組され、書誌ユーティリティとしての活動に本格的に乗り出してきたのが'87年のことであった。

学術情報センターは、国内における書誌調整の要として重要な役割を果たしているが、当初はいろいろな批判を浴びつつのスタートであったこと、図書館界とも距離をおいた状態であったことが思い出される。

現在では学術情報センターと国会図書館との連絡ルートは確立しつつあるが、日本図書館協会(略称：日図協、JLA)との組織としての連絡はまだない様子である。

'80年代の後半から、公共図書館、大学図書館の業務機械化は急速に進行し、現在ではこれらの図書館の大部分にコンピュータが導入されて、資料管理や所蔵資料の検索などの業務に利用されている。これによって、先進的な公共図書館では、また、外部データベースをon-lineで、あるいはCD-ROMで利用する館も増えてきている。

こういう状況で、個々のシステムに対する不満や注文はあっても、コンピュータを図書館業務に導入すること自体は当然のこととなった。

また、最近では安価で高性能なパーソナル・コンピュータが容易に入手されるようになった。現在では、個人でパソコンを所有している図書館員は多数にのぼるし、職場でパソコンを使って仕事をしている図書館員も多く、パソコンの使い方についていろいろ工夫をして、その成果を雑誌に発表する図書館員も多い。

### 3. 図書館とコンピュータ・ネットワーク

昨今はネットワーク、特にInternetを話題にすることが流行である。しかし、コンピュータが普及してきたといっても、大学図書館にもネットワークに接続していないところは相当多数存在する。

国会図書館は予定としては、この発表をする時には接続されている筈である。

公共図書館の場合、同じ自治体内の図書館同士を接続している例はあっても、外部と接続しているところはかなりの少数と思われる。筆者は寡聞にしてInternet接続の準備をしているという公共図書館をまだ聞いていない。学校図書館やその他の小図書館となるとなおさら敷居が高くなる。一部の大企業やコンピュータ関連企業の資料室を除いて、将来的にもInternetに接続されないところが相当あるであろう。

そんなさまざまな環境におかれている図書館員たちが、あるいは図書館利用者や、図書館員志望者まで含めてディスカッションのできる場をつくろうとすると、パソコン通信によることになるのではないか。

### 4. NIFTY-ServeのHP

パソコン通信の大手というとNIFTY-ServeかPC-VANかということになるのであろう。

筆者がNIFTY-Serveに入ったのは'93年4月のことである。当初はDynabookユーザとしてFIBM(IBM-PCのフォーラム)に出入りしたり、ロシア語関係者としてFL(外国語フォーラム)に出入りしたり、ASCII-NETにも入って、DELPHIからtelnetして米国議会図書館のgopherやOPAC(オンライン利用者目録)をながめたりしていた。

そうするうち、『図書館雑誌』の'94年3月号で、枚方市立図書館の南秀幸さんが、NIFTY-ServeでHP(ホーム・パーティー)をやってます、関西在住者を中心に14人います。関心のある図書館の方は連絡をくださいということが書いてあるのに目がとまった[文献1]。たまたまこのHPに参加している知人があることが判り、彼の紹介でパスワードを教えてもらい、7月頃、このHPに参加した。

HPは、1000行だけテキストをセーブできる掲示板で、主宰者は毎月2,000円の別料金が課金される。システム上からは一般利用者にはどんなHPがあるかはわからない。パスワードが必要である。

ちなみに、南さんのHPでは、図書館員または日図協会員ということに参加の条件にしている。

このころ、FSEARCH(サーチャー・フォーラム)で図書館の話題が展開し、図書館のフォーラムをやってみてよいと書いたら、FLEARN(生涯学習フォーラム)で図書館会議室を準備していると紹介され、その議論に加わって、そのまま図書館フォーラム会議室のスタッフとなった。

### 5. ネットのための図書館員

「ネットのための図書館員」というのは、図書館を扱うフォーラムを準備する中で提唱された方向性の一つである。

図書館員が自分たちのために議論したり共同して仕事をする場を持つだけでなく、図書館員としていろいろなフォーラムなどで発言し、その文化を豊かにしていけるということである。

今回の場合に関して言えば、生涯学習フォーラムでは社会教育や通信教育などを扱いはがら、図書館の議論をする場があるといいと思っていたようで、しかし自分たちで運営するより図書館の人がスタッフになって運営する方が望ましいと考えたところであまり一致できたということであろう。

## 6. フォーラム in フォーラム

NIFTY-Serveの中で交流の場をつくるには、いくつかのやり方がある。

さきほど述べたホーム・パーティーもその一つである。

他に、パティオ (PATIO)、フォーラム、クローズド・ユーザズ・グループ (CUG)、バンダー・フォーラムなどがある。

PATIOは、HPの延長上のサービスといえる。512発言まで保持できる掲示板だが、主催者は毎月7,000円を別に課金される。篤志家をつかまえるか、何人かのグループで分担しないと、個人では苦しい。データ・ライブラリーがなく、データ類の頒布に制約が大きい。

フォーラムは、シスオベと呼ばれる主催者とNIFTYが契約する形で運営される。公開の場であり、NIFTYの会員はシステムの場所を探知することができる。また、NIFTYを扱った書籍類には、フォーラムの一覧が載っているのが通例である。

公開の場であるから、いろいろな人が来て、いろいろな発言をしていく。公共の場での発言として問題がある場合には、早急に適切な対応が必要となる。

NIFTY-Serveは営利企業であるので、一定の利用がないフォーラムはとりつぶされてしまうであろう。

一つのフォーラムの中には20までの会議室が設置でき、その中には特定メンバーだけが利用できる会議室を含めることもできる。20種類のデータ・ライブラリーを設けて、バイナリーを含むデータ類を登録・頒布できるなど、うまく維持できれば非常有効なシステムである。

CUGは、特定会員向けにフォーラムのようなサービスを提供できるものだが、最低でも月20万円近い費用がかかり、われわれにとっては現実的ではなかった。

バンダー・フォーラムはCUGとフォーラムの中間に当たるもので、公開のフォーラムの体裁で、会社が運営費の一部を負担する形のものである。メーカーによるユーザー・サポート用のフォーラムに多い。

われわれの図書館フォーラム会議室は、生涯学習フォーラムのフォーラム in フォーラムとして運営されている。要するに生涯学習フォーラムの中に出店を出させていただいている状態である。生涯学習フォーラムにはいくつかそういう店子があって、そこから独立して一人立ちしていくものもある。

会議室のスタッフは5人いる。

職場は公共図書館、大学図書館、企業内の資料室、国会図書館とに分散し、地域も関東3人、関西2人にわかれている。ただし、この春、私の転勤によって、バランスが少し変わった。

館種が違くと資料も利用者も異なり、勤務先の事情もそれぞれ違うので、共通の話をしにくいことがある。その一方で、違った観点からコメントできるというメリットがある。同じ地域に片寄っていないこともよいことだと考えている。お互い、近くに出張するなどの時には、会う機会をつくるようにしている。

スタッフは、自分でNIFTYの利用料金を払って参加しており、多い人は課金が月2万円になる時もあるときく。

## 7. 開設して

9/20の開設以来、これまでの発言数は1600に近づいている(4/25現在)。これは予想以上の盛況であった。また、この間、2つの臨時会議室を設けて、主題を絞って議論する場をつくった。ひとつは昨年11/5 - 12/31に設けたInternetの会議室であり、もうひとつは1/28 - 4/30の阪神・淡路大震災の会議室である。

また、昨年暮れには関東・関西それぞれ忘年会を催し、今年3月には横浜市中心図書館の見学会を行った。

会議室の参加者は図書館員や、図書館員経験者の他、図書館学の教員、学生、利用者など、さまざまである。何人がこの会議室を見ているかは判らないが、おそらく数百人であろう。

会議室と発言者数には、適正規模というものがあると思われる。

あまり多くの話題を一つの会議室で並行して進めるのは、読む方も書く方も大変である。毎日多数の発言があると、話についていきにくくなる。

今年になってから発言のペースが落ちたのは、それまでの発言が適正規模を超えて多すぎたということも理由の一つのような気がする。

逆の方向から見れば、参加したいという欲求は器が小さいため十分に満たされていない状態なので、うまく会議室を振り分けて、それぞれ話題を展開できるようにすれば、発展の余地があるといえる。

## 8. 日本図書館協会との関係

南さんのHPのグループでは、日図協にパソ通を事業としてやってほしいと働きかけをなさっていた。今回、会議室を運営するのにあたっては、日図協とは連絡をとりつつ独立運営ということスタッフ間で申し合わせてある。

これは、日図協側の事業化の検討が今回には間に合わないだろうという状況判断がひとつ、もうひとつには日図協がなかなか乗り出さないなら、こちらで実績をつくって有効性を見ていただくということがある。

また、相互の連絡ルートをつくり、例えばデータ・ライブラリーで日図協の文書類を頒

布できるようにならないかとも考えている。こういうことも含めて、日図協の情報管理委員会と連絡をとっているところである。

## 9. これからの展望と課題

実は、阪神・淡路大地震の時、ボランティアの募集について混乱した情報が流れたケースが生じた。そのあたりについて、知人の日図協職員に聞くと、「情報が流れてよかったけど、組織としてのサポートが課題」と言っていた。

現在、会議室の参加者の多くは「ハンドル」と呼ばれる仮名で登場する。他のフォーラムと比較した場合、図書館の会議室は実名で勤務先を明らかにして登場する割合が大きいが、それも程度の差の問題である。

こういう場であるから、提供される情報は正式に図書館から流れるものでなく、またそれぞれの図書館からチェックされることもないため、ときに混乱の生じる可能性がある。パソコン通信の場では、書き込む内容は参加者の良識によるもので、運営する側は発言の場を提供しても個々の内容に責任を持つわけでない。そういう意味で、各図書館が公的な立場でアナウンスしたり連絡を出したりできる場合は別に必要ということになる。これができるのは、ポジション的には、日図協ではないかと筆者は個人的に考える。

また、図書館が機関として参加できる場がつけられ、全国の数万人の図書館スタッフが職業生活の一部として関わるができるようになることが望ましい。そういう場所はNIFTY-Serveのシステムを利用するのも知れないし、別のシステムによることになるかも知れない。NIFTY-Serveに参加する図書館員は、全国の図書館員のほんのひとりにぎりであり、われわれの会議室の参加者はそのまた一部であるということ踏まえる必要がある。

これからの事業として考えられることは他に、レファレンス事例集の共同構築などの共同作業、目録・書誌類のパソコン通信を通じての提供などさまざまある。

その点では、この会議室もまだ草創期ということで、手が回っていない。

さらに言えば、会議室の現在の参加者は、大学図書館と比較的大きな公共図書館の関係者が多いような印象がある。たとえば、学校図書館や児童図書館の関係者は、発言を見る限りあまり思い当たるところがない。

ホーム・パーティーで活動されている方や他のネットでの活動などとも連絡を取り合っ、お互いが発展できるようにしたいと考えているので、気のつかれた方は連絡いただくと幸いである。

## 参考文献

- [1] 南 秀幸 「図書館員によるパソコン通信：図書館員のHP(ホーム・パーティー)」 『図書館雑誌』88(3) '94.3
- [2] 拙稿 「パソコン通信を利用した図書館事業」 『カレント・アウェアネス』No.185 '95.1